



守られる私から、守る私へ

和歌山県立橋本高等学校 一年 松下 周平

「もし税がなかったら、私たちの生活はどうなるのだろうか。」

そう考えるきっかけになったのは、一昨年の豪雨災害だった。紀の川が氾濫し、町は一時的に避難を余儀なくされた。私の通っていた小学校が避難所となり、私も家族と一緒にそこへ向かった。

体育館に入ると、そこには多くの簡易ベッドや毛布、食料が準備されていた。ボランティアの人々が忙しく動き回り、不安でいっぱいだった私たちに声をかけてくれた。そのとき母が「これも税金で備えられているんだよ」と教えてくれた。私は驚きと同時に、心から安堵を覚えた。もし何の準備もなかったら寒さや空腹に耐えながら過ごさなければならなかっただろう。あのときの安心感は、税がもたらしてくれたものだった。

それから私は、身近な生活の中にある税の働きに目を向けるようになった。毎日の通学路に整備された道路や信号機。夜遅くまで部活動をした帰りに灯る街灯。これらがあるから私は安全に学校へ通え、仲間と部活に打ち込むことができる。当たり前のように存在しているものが、実は多くの人の税によって支えられているのだと気づいた。

さらに、学びの場でも税の力を感じている。私はよく地域の図書館を利用している。試験前には参考書や資料を借り、勉強に役立ててきた。無料で本を手にするのは、図書館が税によって運営されているからだ。経済的な負担を気にせず学びに取り組めるのは、税が「学びたい」という思いを支えてくれるからだと思った。

税は、未来をつくるための投資でもあるのだと実感した。

こうした経験を重ねていくうちに、私は税を「取られるもの」ではなく、「支え合いの仕組み」として考えるようになった。

今の私はまだ高校生で、本格的に税を納めているわけではない。それでも、買い物すれば消費税を支払い、その一部が社会を支えている。

小さな負担でも誰かの役に立っているかもしれないと思うと、納税は、「義務」であると同時に「誇り」でもあるのではないかと感じる。

避難所で感じた安心、通学路の安全、図書館での学び。これらの体験はすべて税に支えられている。

税は「みんなで出し合い、みんなで助け合う」ための約束のようなものだ。これからは、守るだけでなく、守る側になりたい。税を通じて、誰もが安心して暮らせる社会を支える一員になれるように努力したい。

そしていつの日か、「あのときの安心を、今度は自分が次の世代に届ける！」そんな納税者になりたい。